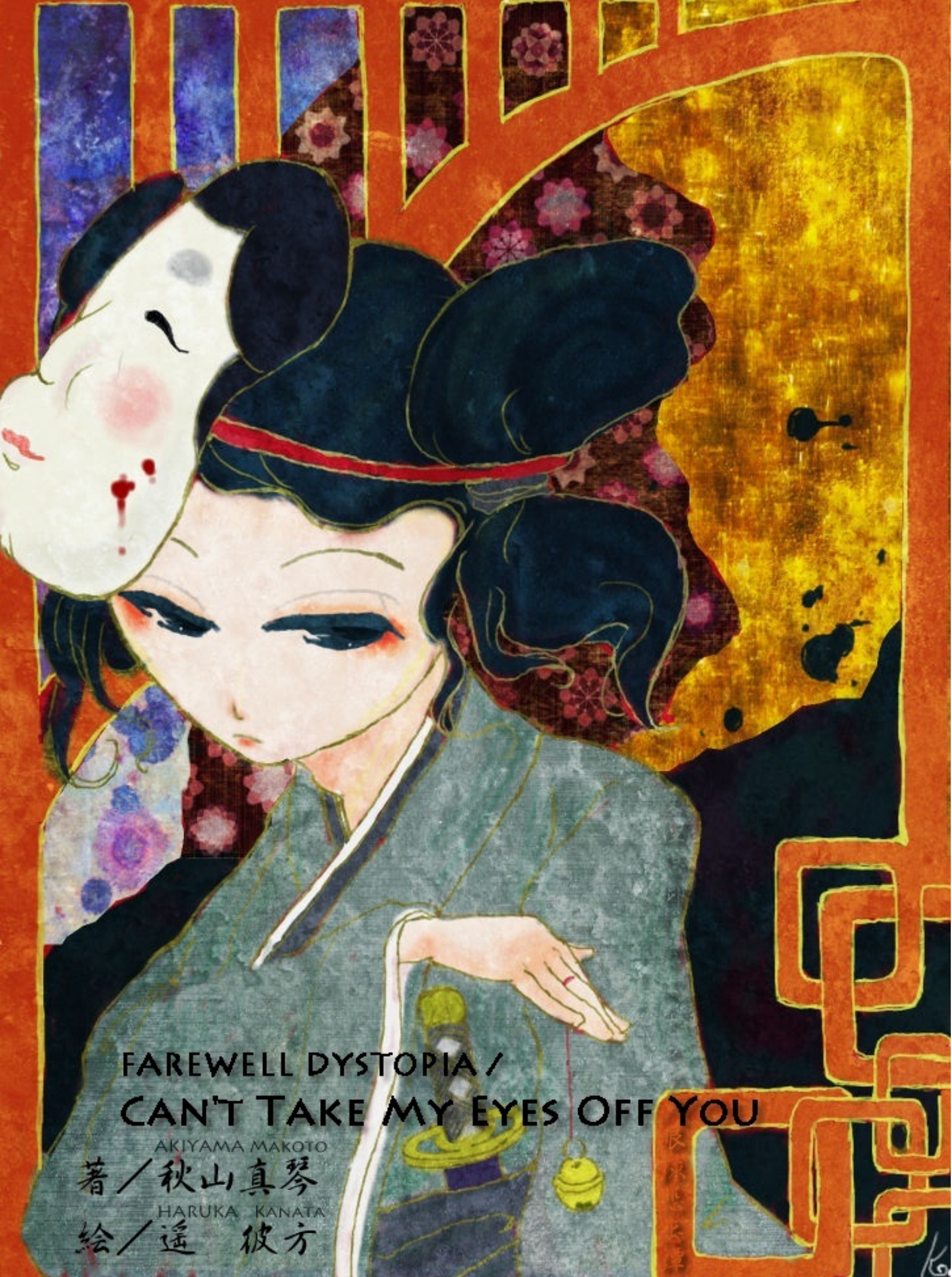


FAREWELL DYSTOPIA



FAREWELL DYSTOPIA /
CAN'T TAKE MY EYES OFF YOU

AKIYAMA MAKOTO

著 / 秋山真琴

HARUKA KANATA

絵 / 遥 彼方

猫が死んだ。

夜明けの散歩についてきた彼女は、なにかに誘われるように、ふわりと脇道に逸れていった。束の間、僕の視界から消えた彼女は、次の瞬間、鋭い声をあげた。

「お兄様」

野良犬にでも襲われているのだろうか、助けを求める彼女を求め、明け方の靄を振り払うも、彼女の姿はない。

「お兄様、早く、お兄様、救けて、嗚呼」

個々の単語を短く区切るように発音するのは、知的な彼女の数少ない癖だった。

十三丁目の裏路地に入り、一家心中した辰神さんの放置された屋敷の庭を抜け、遠ざかってゆく彼女の声を追いかける。そうして、どこにも続いていない、三方を高い壁に囲まれた袋小路で、僕はすっかり変わり果ててしまった彼女の哀れな亡骸を発見した。

可愛そうに心臓を喰い千切られたのか、腹から胸にかけて、肉が根こそぎ奪い取られており、見開かれた眼球はガラス球のようにくすみ、艶やかに輝いていた黒い毛並みも血で汚れてしまっていた。

「遅れてすまない」

ポケットからハンカチを取り出し、軽くなってしまった彼女を持ち上げる。

「構いませんのよ、お兄様」

打ちひしがれている僕に向けられる彼女の言葉は、こんなときでも温かく柔らかい。

「これも天命。書かれていたことだったのです。もう私は逝きますけれど、お兄様、最後にひとつだけ」

「なんだい」

「あの獣の後を追ってくださいまし。私の血肉を喰らい、せかいからせかいを跳ねるように越えてゆく、あの獣の後を」

振り返る。

視線を受け止めるのは、高い壁。

人間には飛び越えられない、猫にも飛び越えられない。他者を拒絶する、高い壁。こんな高い壁を見上げるのでも叩き割るのでもなく、飛び越えることのできる生き物が、この世にいるのだろうか。

「お兄様、先入観を捨てて下さいまし。あの獣は、彼岸より渡りしもの。あの獣は、不死のもの。お兄様の知識には含まれない、未知のもの」

「分かったよ。分かったから、もうおやすみ」

「おやすみなさい、お兄様」

「ああ、おやすみ」

もう一度だけ壁を見上げてから背を向ける。

墓を掘らなくてはならない。

場所はもう決めてある。

弟の墓の隣だ。

彼女にとって結局のところ、僕は義兄でしかなかったのだ。彼女が愛していたのは僕ではない、弟だ。彼女にとって僕は、愛する弟の兄に過ぎなかったのだ。最後の刻限まで。

猫の屍骸と僕の涙を埋めて、庭を後にする。

この、向日葵の咲き乱れる庭を訪れるのは、今日が最後だろう。誰かのために墓を掘ることは、金輪際ないだろうし、それに僕は、これから旅立つ。

彼女が言っていた、せかいからせかいを、跳ねるように飛び越えていく獣を追って。

弟は死んだわけではない。

帰ってこなかったのだ。

夏の暑い日だった。

うっかり、水面に顔を出してしまった金魚が、そのまま太陽光線に魅入られて死んでしまうくらいに暑い日だった。

庭の向日葵は狂ったように咲き誇り、僕も彼女も畳に寝そべったまま動けないでいた。

そんな僕らを見るに見かねた弟は「兄さん、ちょっと出かけてくるよ。隣町に氷飴売りが来ているらしいんだ」と言って出て行った。

彼女は「気をつけてね」と弟に声を掛けたが、僕は返事をする元気もなかった。

弟はそれっきり帰ってこなかった。

一時間ほどして、彼女が突然、全身の毛を逆立てて、外へと走っていったが、僕は気にもしなかった。

やがて日が沈み、ようやく涼しくなり、蕎麦でも食べたいなと立ち上がった僕の足元に、いつの間にか帰ってきていた彼女が身を摺り寄せてきた。

「あのひとはもう戻ってこないわ、お兄様」

「えっ」

「あのひとは彼岸の食べ物を口にして、獣になってしまったわ。もう、このせかいのことは忘れて、隣のせかいへ跳ねて行ってしまった。もう戻ってこないわ」

夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬になっても、弟は戻ってこなかった。

冬が過ぎ、春が過ぎ、また夏を迎え、僕は弟を忘れたが、彼女は忘れていなかった。

夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬の冷たい朝靄に潜んで、彼女を喰い殺した獣。それは果たして弟なのだろうか。

真昼の白い月を見上げてから歩き出す。目算はない。手掛かりは彼女の遺した言葉だけ。それだけだ。当てもなく歩き続け、僕はいつしか彼女の亡骸を見つけた袋小路に辿り着いていた。三方を高い壁に囲まれた、行き場所も逃げ場所もない、出口のない行き止まり。

足元に目を向けると、小さな果実がひとつ転がっていた。

スモモ、だろうか。

拾い上げてみると、ツンと甘酸っぱい匂いが漂った。ほどよく弾力があり、よく熟れている、ちょうど食べ頃であろう。けれど、色が尋常でなかった。実ったばかり緑でも、熟れた紫でも

なく、蒼。青空の爽やかな青ではない、宇宙の、あるいは深海の濃い蒼。

果物の色ではない。

けれど。

「あのひとは彼岸の食べ物を口にした」

彼女の言葉が耳元で甦る。

そう言えば、と泥濘を掻き回すように、昔の記憶を掘り返す。

あの頃、隣町にやってきていた氷飴売り。幟の掲げられた荷台を押しながら、あの麦わらの男が売っていた氷飴は、ちょうどこんな蒼色ではなかっただろうか。

がぶり。

気がついたとき、僕は果実を口にしてしまっていた。それは、完全に無意識の行動だった。しかし、後悔はない。これはきっと彼女が僕のために、ここに置いてくれたものだ。

口のなかに広がるのは、濃厚な甘ったるさ。眩暈を覚えるほどに甘い果実を飲み込み、さらにもうひと齧りする。がぶり。口腔内に信じ難いほどに甘い香りが立ち込め、頭に靄が掛かる。手足が痺れるほどの甘さ。

けれど。

それまでだった。

芯だけでなく種も残さず飲み込んでしまったが、僕の肉体が変化することはなく、見たこともない獣が現れることもなかった。

蕩けるほど甘かった息も、やがて中和され、何事もなかったように、袋小路に、ただひとり立ち尽くしていた。

「帰るか」

高い壁に背を向けて、歩き始めると、じきに視界の隅に妙なものがあることに気づいた。

霧だ。

それとも、靄だろうか。

まだ日は高く、霧や靄が立ち現れるような天候ではない。しかし、現に僕の視界の隅に、霧が柱にしがみついていた。

辰神家の庭まで戻ると、霧が絨毯のように雑草を隠していた。棚から落ちた盆栽も、砕け散った窓ガラスも、霧の浅海に沈んでしまっている。

十三丁目の路地に戻ると、有様はもっと酷かった。どこから湧き出ているのだろうか、通りは腰のあたりまで霧に満たされており、十二丁目から先は、完全に見えなくなっていた。見たこともない濃霧だ。

僕は逃げるように高台へと向かう。

そんな僕を追いかけるように霧も、どんどん立ち上ってくる。瞬く間に十三丁目も、霧の海に沈んでしまった。

「お兄様」

彼女の声が聞こえた。

「お兄様」

何処から？

「お兄様」

見れば霧の向こう、純白の闇の幕の向こうで、漆黒の肢体が踊っていた。軽快に足を繰り出しながら、こちらに向かってきている。その仕草は生前の彼女を思い返させる、懐かしい光景。

しかし、

僕は、

背を向けて、走りだした。

この街は四方を高い壁に囲まれている。十三丁目の外れで見つけた壁とは比べることも出来ないほど、高い、有象無象を排斥する壁。そう、壁は僕たちを守ってくれているのだ。外のせかいでは風が吹き荒れている。それは、命の灯火を吹き消す、魔性の黒い風。

高台のうえには塔が立っている。

身寄りのない老人がひとりで暮らしている、灰色の塔だ。

その塔を、僕は通り過ぎる。

背後から彼女の声が追いつがってくる。

霧の海も、どんどん高度を増してきている。

こっち側ではない。

向こう側だ。

確信を込めて跳躍する。

この街は古代貝のように螺旋を描いている。一丁目から十三丁目まで、少しずつ上ってゆき、高台へと続いているのだ。だから、高台から飛び降りれば反対側、一丁目に戻る。

高台の展望台の手摺りに足をかけ、大きく跳躍した僕は、天高く舞い上がってから、すぐに頂点に達し、緩やかに下降し始め、そのまま霧の海に没した。

高台から一丁目までの間に、どれだけの空間的な開きがあるのかは分からない。落ちきるのにどれくらいの時間が掛かるのかも分からない。

ただ、ひとつだけ分かるのは、落ちたときに僕の肉体は四散し、即死することだけ。

その分かりきった未来を受け入れることを、僕は拒否した。

視界は真っ白の闇に閉ざされている。

びゅうびゅうと唸る風に遮られ、もはや彼女の声も聞こえない。

時おり翼を持っていたり、三つ首の動物の姿が霧の向こうに見え隠れしたが、はっきりと見えただけではない。

なにも見えない、濃霧のなかを、僕はいつまでも落ちつづけていた。

ふと思いついて時間を数え始めるが、十まで数えたところで無意味であることを知る。既に現実のせかいで、あれば僕は一丁目の地面に叩きつけられて死んでいるはずだ。

或いは既に死んでいるのかもしれない。

もしくは、実際には、まだ何秒も経っておらず、僕の時間感覚が狂っているのかもしれない。

いずれにせよ。

まだ生きている。

生きて思考している。

「おい」

え？

「おい！」

誰だ？

「小僧、起きやがれ、そこは俺の場所だ」

側頭部に衝撃が走る。見上げると、貧相な格好の垢抜けない男が、僕の頭を蹴りつけていた。

「なにをするんだ」

立ち上がって抗議する。

「それは俺の科白だ。こんなところで眠りやがって、商売の邪魔なんだよ」

「は？」

周囲を見回す。

いつの間にか霧が晴れていた。

それどころか、地面に足をつけて立っていた。

そこは見たことのない場所であった。石造りの建物が並んで建っており、その足元に布を敷いた男たちが座り込んでおり、商品だろうか、何かを売っていた。男たちの身なりも、建物の質もずいぶんと低いように感じられた。

「それとも、お前。俺が来るのを待っていた客か？」

「なにを売っているんですか？」

「気持ちよくなれるものさ。薄荷や水銀、異流紫苑も置いているぜ」

「異流紫苑？」

薄荷や水銀は、なんとなく分かったけれど、聞き慣れない言葉がひとつ含まれていた。

「これさ」

男が麻袋から取り出したのは、蒼色の小振りな果実であった。

「あっ！」

「おっと、売り物に触れるのはご法度だ」

思わず手を伸ばしかけたけれど、その前に男がひょいと手を持ち上げてしまった。

男の手の中にある蒼い果実。それは、まさしく、あの袋小路で発見したものに間違いなかった。ずいぶんと小さくはあったが。

「あまり大きくないね」

「おいおい、小僧、舐めた口を叩くじゃねえか、モノホンの異流紫苑を入手しようとしたら、それこそ命がいくらあっても足りはしねえだろうがよ」

男はひょいと手刀で首を刎ねる動きをした。

「こう、だぜ」

「犯罪なの？」

「当たり前だのこんこんちきだ。で、ところで小僧。お前さん、金は持っているのか」

「お金？ あるよ」

財布を取り出し、とりあえず千円札を見せることにする。

「おいおい小僧。まさかと思ったが、お前さん、この福笑い通りに迷い込んだ直後かよ。厄介なもんに捕まっちゃったぜ、くわばらくわばら」

「このお金、使えないの？」

「使える訳があるか馬鹿野郎。ここは福笑い通り。あらゆるせかいから迷い人を受け入れる、せかいのどん底だぜ」

「福笑い通り？」

「そうだ」

「おい！」

突然、通りの向こうで怒声があがった。

見ればひとりの男が大きく手を振りながら、こっちに駆けて来るところだった。

「おたふくさまが来るぞー！」

男の声が通りに響き渡った直後、静かなざわめきを伴ない、通りの様子が一変した。

それまであぐらをかきながら品物を並べていた商人たちは、大急ぎで商品を袋のなかに詰め込むと、代わりに蹴鞠や剣玉といった子どもの遊び道具を並べ、さらには着崩していた衣類をただし、きちんと正座した。

男も「やべえ」と呟くと、僕を押しやり、大急ぎで布を敷くと、そのうえに型抜きを道具を並べ「小僧、ここに座りな」と言いながら自分のすぐ横に作った空いた場所を叩いた。

緊迫感を帯びた雰囲気の中で背中を押されるように、男の言うことに従うことにする。

ちりん。

男の隣に腰を下ろした直後、通りの向こうから鈴の音が聞こえてきた。思わずそちらを向いて驚いた。

「小僧」

気づけば男は頭を下げていた。

見渡してみると、商人たちは全員が全員、頭を下げて土下座の体をなしている。ちりん。再び鈴が鳴る。僕も頭を下げる。

「小僧、静かにしてな。静かにしていれば、すぐに終わる」

ちりん、ちりん。

鈴の音が少しずつ近づいてくる。頭を下げたまま、目を動かすと草履を履いた足が、道端の小石を蹴っ飛ばしたのが見えた。小石はまっすぐとこちらに向かってくると、僕の頭にぶつかった。

「うっ」

ちりん。

鈴の音が止まる。

隣で男が震えたのが分かった。

「其方」

伶俐な声が聞こえた。

それは若い女性の声だった。

「面を上げよ」

再び隣で男が震える。

しかし、それ以上に動くことはしない。

女性は果たして誰に声を掛けているのか？

「金魚売り、其方のことだ」

えっ。

一瞬の困惑、そして納得。

確か向かいの商人だ。慌てて金魚が入った水槽を取り出して、並べていたのは。

「面を上げよ、金魚売り」

「はっ」

「応えよ、其方の後ろの麻袋の中身は？」

「き……」

「聞こえぬ、はっきり言え」

「き、金魚でございます」

「拙者は嘘を好まぬ。もう一度、聞く、次は正直に応えよ。麻袋の中身は？」

「……………刀、でございます」

「だろうな。柄が見えておるぞ」

ちりん。

「刀剣の販売は、死罪である」

ちりんちりん。

鈴を二度鳴らすと、また草履が地面を蹴るのが聞こえた。その音は少しずつ遠ざかり、やがて聞こえなくなり、さらにどれほどの時間が経ったのだろうか、それとも気のせいかな。

顔を上げる。

目の前に、惚けた顔の男が転がっていた。

「ひっ」

転がっていたのは男ではなかった。男の首、ただそれだけだ。

どうして気づかなかったのだろう。あたりに漂っているのは、血のにおい。男は首を刎ねられたのだ。

既に斬首された男の左右の商人たちは、店仕舞いを始めている。男も、型抜きを道具を麻袋に戻し始めている。

「帰るぞ、今日はもう仕事にならねえよ」

通りの向こうへ視線を飛ばす。

もう聞こえない鈴の音を追い求め、走り出し、角を曲がる。けれど、そこに広がっていた風景は、背後のそれと同じ。商人たちが品物を並べて客が通りかかるのを待っている。ただ、異なるのは表情だろうか。この通りに死者の姿はなく、生者は安堵の表情を浮かべていた。

あの鈴音の持ち主。

僕が一瞬、見たのは着流しを身にまとい、大小二本の刀を佩き、おたふくのお面を被った侍風の男であった。

でも、あのときに聞こえた声。聞き間違えることはない。あの声は、まさしく霧の向こうに消えて亡骸となって戻ってきた、弟を愛していた、彼女の声だった。

呆然と立ち尽くしていた僕は、やがてやってきた男に引きずられ、彼が寝起きしている長屋へと連れて行かれた。

そこは饅えた臭いに溢れ返っていた。

欄干に干されていた黄色い服には、大きな蠅が止まっていたし、縁の欠けた茶碗の底では、蟻が一匹、干上がっていた。

「俺のことは高西とでも呼んでくれ」

「高西さん」

「ああ。小僧、お前さんは名乗る必要はない。どうせ、前世の名前も経験も、ここではなんの意味もない。お前さんと出会った日に、おたふくさまが通り掛ったのも何かの縁だろう。そうでなければ、福笑い通りに迷い込んだものには、それが誰であろうと一週間は付き添い、ひとり立ちを手助けしなければならない、なんていう規則も無視していたところだが、まあ、いい。なんでも聞いてくれ」

「ここは、何処です？」

「福笑い通り。あらゆるせかいのつまはじき者が集まる、どん底だよ。さらに、一度、ここに落ちちゃったら、もう這い上がることだってできやしねえ。死ぬまで、いや、自然に死ぬことはないから、誰かに殺されるまで、この底辺で暮らしていくしかない。もし、死にたくなったら、誰かを殺すことだ。俺たちの勝手な殺生は禁じられている。もしひとを斬れば、すぐにおたふくさまが斬りに来てくれるさ」

「ひとを探しているんだ」

「なるほど、迷い込んだのではなくて、追いかけていたら辿り着いた口か。そいつの情報を教えてくれ、もしかしたら知っているかもしれない」

「ふたりいるんだ。弟と、彼女」

「曖昧だな。つい最近のことなのか？」

「弟は一年半前、彼女は今朝」

「今朝、か。そっちのせかいとこっちのせかいじゃ、時間の流れが違うだろうから保障は出来ないが、お前さんと同じように、つい最近こっちにやってきた連中を探せば、彼女の方は見つかるかもしれないな。弟の方は、そんなに前じゃ分からねえな」

「名前は……」

「言う必要はないぜ。言っただろう、前の名前は意味がないってな。さ、ここで押し黙っていてもどうしようもない。探しに行こうぜ」

「高西さん」

「あん？」

「なんでもないです」

「なんでえ、気持ち悪いやつだな」

高西さんの案内で、うらぶれ長屋を出て、ふりそで遊廓へと向かう。

大抵の女は、このせかいに落ちてくると遊女として、第二の人生を開始することが多いそうだ。厳しい規律を持つ福笑い通りは、誰に対しても厳しい。知らなかったと弁明しても、容赦なく斬られてしまうそうだ。

だから、まずは規律を侵すことも出来ないほど自由を制限された遊廓からなのだ。女たちは遊廓に入ること命を長らえ、女たちを遊廓へと入れたものへは金銭が与えられる。もちろん、それを渡しているところを見つかれば、買い人と売り人はおろか、その女も斬られることになるのだが。

しかし。

結局、僕は、ふりそで遊廓に辿り着くことすらできなかった。

左右に三階建ての建物が並び、その間には洗濯物を干すための縄が掛けられていた。縄には衣類や寝具が干されており、なんとなく薄暗く、湿っぽかった。

そんな道を高西さんと歩いていると、背後から走ってきた子どもとぶつかってしまった。

「おい、気をつけろよ！」

怒声をあげる高西さんを無視して、子どもは通りを駆け抜け、角に差し掛かったところで、いきなり立ち止まった。

ちりん。

「はあっ!？」

高西さんが珍妙な声をあげる。

角からおたふくのお面を被った着流しの人物が現れた。その手には、抜き身の刀が提げられており、刀の柄には鈴が結えられていた。

少年は一步、二歩と後じさりすると壁にぶつかり、ぽろりと首が落ちた。なんと言うことはない、既に斬られていたのだ。

あまりに太刀筋が研ぎ澄まされていたからだろうか、刀に少年の血や脂はついていないように見受けられたが、おたふくのお面を被った人物は懐から取り出した紙で、刀の表面を拭いながら、こちらに近づいてきた。

「やべえぞ、小僧！ 急いで壁際に寄れ、頭を下げるんだ！」

迅速極まりない動きで高西さんは、壁際に寄ると土下座の姿勢を取った。僕は、しかし後に続くこともしなかった。

腰の後ろに当てた手の隙間から、どろりと血が溢れて地面に落ちた。

ただ、順番が逆転したに過ぎない。

僕はきつと死ぬのだ。

だから少年は斬られたのだ。

死にたかったのだろう。

誰かを殺してでも死にたい。

それは、自殺することよりも、ずっと辛い。

ここはそういう場所なのだろう。

いつの間にか、目の前に、おたふくのお面を被った人物が立っていた。既に刀は、腰の鞘に納めている。

間近で直視して分かった。着流しをまとい、男のような格好をしているが、このひとは女性だ。もしかしたら、さっきのおたふくさまと同一人物かもしれない。

「お兄様」

おたふくのお面が地面に落ちる。

彼女だった。

「どうして、来てしまったの、お兄様」

「君が喚んだからさ」

手を伸ばし、そっと髪を撫でる。さらさらと、その髪質はやっぱり触り心地が良い。

「僕は弟とは違う。君を置いて行くことなんてしない。君が迷ってしまったり、連れて行かれてしまっても、すぐに迎えに行くよ」

「嗚呼、お兄様、嗚呼」

彼女は僕の胸に飛び込んでくると、頭を押し寄せてきた。僕は彼女を抱きしめようとするけれど、既に下半身が真っ赤に染まるほど血が抜けてしまっている。ちからが入らず、彼女に押し倒されるかたちで、倒れてしまう。

「お兄様、お願い、死なないで、お兄様」

髪を撫で。

言葉を返してあげようとしたけれど。

声が出ない。

口が開いても。

もう声が出ない。

「お兄様、お兄様、お兄様」

彼女の呟きが僕の胸を叩く。

けれど、それも、もう聞こえない。

頭が痛い。

視界が軋み、耳のなかでは雑音が跳ねる。

跳ねる。

飛び跳ねる。

そのとき。

鮮烈なイメージ。

それは、せかいからせかいへ、跳ねるように越えていく獣の偶像。

目の前にうずくまっている。

「兄さん？」

「まさか、お前なのか？」

「やっぱり、兄さんだ。久しぶり」

手を伸ばす。

しかし、ずぶずぶと。

獣は、蠢く闇の塊であった。まるで、せかいじゅうの闇を集めて、一箇所に押し込め、生き物のかたちにしたような。

「どこに行っていたんだい、兄さんは」

「それはこっちの科白だ。お前が帰ってこなくなって、ずいぶんと心配したんだぞ」

「嘘だね」

「嘘なんかじゃない」

「嘘だよ。だって兄さん。僕を殺したのは、兄さんじゃないか」

井戸の底。

積み重ねた石の間から染み出る僅かな水。

「僕は七日間も生き延びたんだよ。あの、暗い暗い井戸の底で」

「嘘だ」

「嘘じゃないよ、忘れてしまったの？ それとも、記憶を書き換えてしまったの？ 僕を殺したのは、兄さんだよ」

「嘘だ」

押しのけ、振り払う。

けれど集束した闇は、霧と違って、振り払うことができない。執拗に絡みつき、離してくれない。

「兄さん、兄さん、兄さん」

闇が膨らみ、闇が迫り、闇に吞まれる。

兄さん、お兄様、兄さん、お兄様。

弟の声が、彼女の声が、僕を囲む。

暗黒の闇に視界を閉ざされ、僕はいつしか落ちていた。果てしなく、落ちていた。

やがて。

着地。

そして、

四散。

見あげれば、そこにあるのは抜けるように青い空、照りつける太陽が眩しい。

いつの間にか霧は晴れていた。まるで最初からなかったかのように、どこにも、その残滓を見つけれない。

僕の身体は、六十六の欠片に分散し、一丁目の交差点に散らばった。片目は潰れ、片目は道路に転がっている。他の部位がどうなっているかは分からない。

視界が揺れる。

誰かに拾われる。

反転。

目が合う。

彼女が僕の眼球を拾い上げていた。
にっこりと微笑を浮かべ。
僕は彼女の口腔のなかに放り込まれた。
穏やかな赤、残酷な白。
断罪の嚙下は、しかし慈悲深く。
僕は眠りに就くように、死に絶えた。

FAREWELL DYSTOPIA / Can't Take My Eyes Off You

<http://p.booklog.jp/book/42259>

著者：秋山真琴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/unjyoukairou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42259>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42259>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.